



# 館長だより

山形県産業科学館

令和6年4月19日(金)

発行 館長 加藤 智一

## あの人に会いたい マイケル・ファラデー先生 吉野 彰先生

化学を志した著名人のみならず、私の尊敬する諸先輩方も、「化学を志したきっかけ」を問われると、ファラデー先生の「ロウソクの科学」あるいは寺田寅彦先生の「茶碗の湯」と答える方が多い。実際2019年ノーベル化学賞を受賞した吉野彰先生も、ファラデー先生の「ロウソクの科学」を小学生のときに読んで科学者になろうと思ったそうだ。かく言う私も、「ロウソクの科学」と「茶碗の湯」を読んでそう思った。と言いたいところだが嘘です。小学生のみぎり、読むことは読みました。これは嘘ではありません。そこからが天才と凡人の差がつくところで、私は、読むことは読んだが、難しくてさっぱり理解できませんでした。

ところが、産業科学館にこの本があることに先日気付き、早速手に取り読んでみた。相変わらずすぐには理解できませんでした。本当に小学生の吉野少年はこれを理解できたのか。正直なところを教えてください。一度でも「ロウソクの科学」を手にとったことがある方ならおわかりいただけると思いますが、ファラデー先生は、単純にロウソクの燃焼を説明しているではありません。ロウソクを構成している元素、そしてその元素由来の分子、生成物に至るまで、化学的性質だけでなく、物性も含めて丁寧な実証実験を行い説明しているのです。

私事ではありますが、サイエンスインストラクターの活動で、小学校や公民館に出向くと必ず保護者の方々がついて下さるので、私は、理解が難しいと思われる実験では、必ず保護者の皆様に質問をふります。保護者がどのくらい理解してくれているのか、顔色見ながら話することも、度々ありました（決して子ども不在ではないよ）。ファラデー先生も同じ気持ちで実験していたのではなかろうか。「少年少女諸君」と語りかけてはいるけれど、「大人の皆さんこそ理解してくださいね」といった本音、ニュアンスがあったのではないかと。ファラデー先生そのところどうでしょうか。教えてください。

### 館長の読書

小川糸作品「ツバキ文具店」「キラキラ共和国」「椿ノ恋文」これら鎌倉を舞台にした連作を通して、私が感じた世界観をご紹介します。こうと思います。タイトルの、

#### 「キラキラ光る言葉の発見 鎌倉への誘い」

第二回「学校図書館から広がる世界」

もともと私は読書が嫌いなわけではない。佐伯泰英氏の居眠り聲音シリーズやその続編的な空也十番勝負シリーズ。そして佐々木裕一氏の公家武者信平シリーズもほぼ読破している。つまり、娯楽時代劇が好きなのである。しかし、私の読書観を大きく変える出来事が今年の三月末に訪れた。そのきっかけとなったのは、米沢市内某高等学校への再任用通知。片道50km以上を毎日車で通うのは、私にとって苦痛以外のなにものでもない。当然残された通勤手段は電車。しかも高校生と一緒に混み合う車内を40分以上も一緒にするのはさすがに気が進まなかったのだ。夢の新幹線通勤を実践することにしました。毎日座れるし、帰りに一杯ひっかけた。だれにも咎められない開放感。たまらない。しかしそれも、一ヶ月もすると飽きてくるものである。

そこで徐々に傾倒していったのが読書の世界である。往復の通勤時間は私にとって物語の世界に没入できるとっておきの時間となった。そのために欠かせないのが学校図書館の存在。

結局、四月から翌年三月までに五〇冊余りを借りて読んだことになる。はじめの頃はとにかく新刊ばかり読んでいたが、心の深い所を持つていられるような重たい小説は、通勤時間の合間に読むものではないことに気づき（体に悪い）、書き手を選んで、できるだけ軽い（他人事でいられそうな）内容を選ぶようになってきた。そんな中出会ってしまったのが、小川糸さんである。糸さんが山形市ご出身で、私の実父が眠る菩提寺近くでかつてお暮らしていたことは、何となく噂に聞いていたし「グリーンピースの秘密」に登場してくるコウシロウ洋菓子店は、大学生時代の通学路にある人気店であったことも、興味を持った理由の一つである。また、小説の舞台である鎌倉も私の好きな場所。ここ数年、東京出張の折など都合をつけては訪ねている。かつてテレビドラマ「最後から二番目の恋」のロケ地、極楽寺駅のプラットホームや浄土ヶ浜に立つと、今でも小泉今日子さんと出会えるような気がしてドキドキするのである。

今回はこれまで、第三回「キラリと光る言葉の数々」乞うご期待。